

# 岩手の学童保育拡充を



岩手県学童保育連絡協議会  
〒020-0122  
盛岡市みづけ3-38-20  
岩手県青少年会館内  
Tel・Fax 019-681-0651

## 指導員学校・合宿研

岩手県学童保育連絡協議会主催の第47回指導員学校・第32回合宿研修会は8月24、25の両日、八幡平市のホテル安比グランドで開催されました。県内の学童保育の保護者、指導員ら261人が参加し、岩手の学童保育の拡充に向けた学習や交流が行われました。



地元を代表して歓迎のあいさつを述べる佐々木敦亨滝沢市連協会長

1日目は開会行事の後、6会場に分かれて分科会が開かれ、実践交流やグループ討議などが行われました。このうち「子どもたちのために岩手の学童保育の拡充を」をテーマに開かれた第1分科会は、児童福祉法の改正により来年の4月から指導員の配置基準が参酌

(参考)化されることを受け、今後の運動方針の説明や討議が行われました。

はじめに門田弘之県連協事務局長が児童福祉法改正に至るまでの経過や、これまでの県連協の取り組みについて説明しました。

続いて、千田広幸県連協会長が県連協の今後の運動方針を説明。①条例を改定させないよう、県内全市町村に要望書を提出する ②地域連協がある地域については自治体、議会に対して要望書の提出や議員懇談会の開催を求めていく ③地域連協がない地域のうち県連協の個人会員がいる一関市、奥州市、釜石市は地域の学童クラブと学習会や懇談会を行いながら、県連協と地域の学童が共に働きかけを行っていくの3点を提起しました。

説明後は意見交換が行わ



長で大妻女子大学講師の真田祐さんは「離島の小学校や保育所でも教員や保育士は複数人いる。それは、そういう配置基準になっているから。子ども一人でも指導員が複数人必要というのは子どもの権利を守るための最低基準だ。行政や議会と共通理解を図りながらこの基準を守っていく必要がある」と強調しました。

### 第1分科会 まとめ

様々な問題意識がある中

で、県連協は放課後児童クラブ運営指針にある「子どもの最善の利益を考慮する」に基づき進めてまいります。加盟クラブの皆さんのご意見、要望を伺いながら、子どもたちの視点からより良い学童保育を目指す活動に活かしていきます。

## 指導員配置基準の市町村条例を改定させないための取り組み

### 一 行動提起 一

- ◆条例を改定させないよう、県内全市町村に要望書を提出する
- ◆地域連協がある地域については自治体、議会に対して要望書の提出や議員懇談会の開催を求めていく
- ◆地域連協がなく県連協の個人会員がいる地域は、学習会や懇談会を行いながら、県連協と地域の学童が共に働きかけを行っていく

# 当たり前前の日常 簡単ではない

横須賀市岩戸矢部学童クラブ指導員

## 永松範子さん講演



保育へ寄せる思いを語る永松範子指導員

2日目は、神奈川県横須賀市岩戸大矢部学童クラブの永松範子指導員が「子どもと保護者の思いに気持ちを持って」と題して全体講演を行いました。

講演の冒頭では同クラブが取材協力して東京学芸大学が製作した「子どもの施設学童保育」のDVDを上映。永松指導員は「三間（時間・空間・仲間）の喪失が言われて久しい。子どもたちの放課後は少しずつ変化していて、学童は親や学校が望む保育をしてしまいがち」と指摘した上で「日々の保育では普通であることを大事にしている。当たり前前の日常は簡単には

できない」と話し、保育に込める思いを講演しました。永松指導員は、転校で市内の別の学童に移った児童が、保育の不十分さから生活が不安定になってしまった経験から、研修の大切さに目覚めたと話し、「初めからの指導員はいない。学び続けることこそが、子どもの前に立つ資格」研修の身を振り返り、現場に活かすことが大切」と研修の重

要性を訴えました。保育の中で大切な視点として、「子どもは面倒なことを起こしながら大きくなっていくもの。子どもを『変える』のではなく、子どもを『理解する』ことが大切」と述べ、子どもの思いに気持ちを寄せることの大切さ説きました。また、「保護者は子どもの様子を知ることができ、安心して働くことができる」と述べ、指導員の仕事は保護者との信頼関係が土台になると解説しました。同クラブでは、毎年テーマを決めて子どもたちに作文を書いてもらっており、子どもたちが学童について思っていることや、大人に言いたいことが書かれた作文が紹介されると、会場は笑いに包まれました。思いがけない発想や自由な表現に、学童保育で伸びやかに育つ子どもたちの様子を垣

## 人と人とのつながり大切に

ほいく誌の普及、拡大にあたって

全国連協 佐藤愛子 さん

2日目の全体講演に先立ち、全国学童保育連絡協議会事務局次長の佐藤愛子さんが「日本の学童ほいく誌」についての講話を行いました。

佐藤愛子さんの講話の要旨は次のとおり

◇ ◇  
ほいく誌は指導員、保護者の行動、思い、実践の蓄



佐藤 愛子 さん

積。私とほいく誌の出合いは、保護者としてだった。娘の通っていた学童クラブの指導員が通信で2003年4月号のほいく誌の講座の内容を紹介していた。その文章を読んで、(北海道教育大学の)庄井先生の子どもの捉え方に心を打たれた。以来、保護者の集まりなどでほいく誌を話題に

していったところ、読者モニターを引き受けることになった。04年2月号の子どものひろばに、娘が学童保育で書いた「あのねノート」が掲載された。読んでみるとわが子と一緒に育つ他の子どもたちのことがよく分かり、学童保育と人と人とのつながりを感じとることができた。

そして、子育てで戸惑いを感じた時には05年の10月号の中西先生の講座を読み返した。この文章はその間見ることができました。講演の結びには「指導員の仕事は苦悩・葛藤・自己変革なしにはできない仕事。想像力と共感性が求められる。続けないと見えない景色もある。感謝すること、鍛えること、続けることを大切に、子どもと保護者の思いに寄り添える指導員になろう」と会場の参加者に呼びかけました。

後、何度となく私の力になってくれた。その後、ほいく誌の編集に携わる立場になった。ほいく誌は日本で唯一の学童保育の専門誌であり、信頼できる情報源となるよう、執筆者や原稿内容に気を配っている。また、働きながらの子育てを重視するような記述は避け、安心して読んでもらえることを大切にしている。作る立場として、実践の姿や、皆さんの家族、仕事に寄せる思いをかみしめている。岩手の皆さんにはたくさんほいく誌を購読していただいている。人と人とのつながりを大切に積み重ねてきた「ほいく誌」を引き続き、ご愛読いただけたら嬉しい。